

四川省の竹文化に関する資料初探

于 亜, 石田 曜*, 張 揚**

要 旨

中国において竹を使用した最も早期の痕跡は7千年前の河姆渡遺跡に確認できる。千年余りの変遷を経て、竹は文化として中国人の衣、食、住、行、娯楽に浸透し、文学、音楽、絵画、宗教、民俗、園林などに影響を与えている。

近年、中国では様々な竹林資源の活用に関する取り組みが推進されており、竹林資源の管理・利用、竹材を新たに利用しようとする際の竹材供給システムの構築など、様々な角度からの研究が進められている。本研究では文化的要素である竹を対象として、四川省における竹と生活文化のありかたについて検討することを目的とする。

キーワード：竹文化、四川、生活習慣

1. はじめに

1.1. 研究背景と目的

中国において竹を使用した最も早期の痕跡は7千年前の河姆渡遺跡に確認できる¹⁾。千年余りの変遷を経て、竹は文化として中国人の衣、食、住、行、娯楽に浸透し、文学、音楽、絵画、宗教、民俗、園林などに影響を与えている。

竹は中国南部の福建省、江西省、湖南省、浙江省、四川省などに広く分布しており、古くから人々の日常生活、園林景観や農業・漁業などの産業には欠かせない資材として活用されてきた。国家林業局が2013年6月に発表した「全国竹産業発展規劃(2013~2020)」によると、全国の竹林総面積は672.74万 ha (67,274 km²) で、森林

* 山東師範大学外国人教師
** 四川工商学院外国語学院副教授

面積の3.48%を占めている²⁾。

本研究の対象地である四川省は中国南西部、揚子江の上流に位置し、「竹の産地」として知られている。四川省林業和草原局によると、2021年5月末までに四川省には160種あまりの竹類がみられるとされている³⁾。竹林面積は1,815万ムー（12,100 km²）に達し、国内で1位である。また竹産業の生産額は721億元（1兆3,000億円）に達し、国内2位である⁴⁾。

2017年7月17日には四川長寧竹林生態系国立観測研究基地が発足した。これは四川省の竹産業において先駆的な動きといえる。研究基地の役割は竹の生態系とその特徴に関する研究、そして中国と世界における竹林資源の開発や利用、持続可能な管理のための科学的基盤を提供することである⁵⁾。

さらに、近年、中国では様々な竹林資源の活用に関する取り組みが推進されている。なかでも中国最大の竹産業のイベントとして中国竹文化祭が挙げられる。1997年に最初に開催されたこの文化祭は、毎回竹林資源が豊富な地域で行われている。2021年の第11回においては、四川省宜賓市が開催地として選定された（もともと2020年の前半期に開催される予定であったが、新型コロナウイルスのまん延により2021年に延期）。宜賓市は、これまでに中国竹文化祭を2回開催した唯一の都市である。

この竹文化祭は2021年10月19日から21日まで四川省林業和草原局、四川省人民政府、国際竹藤グループにより共同開催された。そのテーマは「竹福美麗中国、促進鄉村振興（竹の恵みと美しい中国、農村の活性化を促進する）」であった。竹に関連する情報の発信、竹を活用した事業や製品の創出、健康や自然環境の保護などに取り組むというのがこのイベントの趣旨である。竹材製造や竹細工、タケノコ栽培など竹にまつわる産業・文化の関係者が集まり、投資の誘致、展示販売、竹文化の体験、地元の竹をテーマにした文芸公演、竹書道、竹写真、竹食、竹の無形文化遺産、民俗竹芸術などテーマ別にイベントが行われ、オンラインでも竹製品の展示と販売、竹の観光振興のイベントが実施された。四川は竹林業の中心として竹林資源の利活用や環境保全、今日的な竹文化学習の場としての役割を担っているといえる。

また学術界では、1982年「竹子学報」（原名は「竹子研究彙刊」）が創刊された。中国内外の竹林資源、竹林栽培、竹林経済、竹加工、竹食品、竹文化など、竹に関する基礎理論の研究、応用基礎研究、竹産業開発などの成果が多く発表されている。

以上の背景から、本研究では文化的要素としての竹を対象として、四川における竹と生活文化のありかたについて検討してみたい。

1.2. 本研究と関連する先行研究

現在、既存研究では竹林資源の管理・利用、竹材を新たに利用しようとする際の竹材供給システムの構築など、様々な角度からの蓄積がみられる。ここでは四川省を対象とした研究を概観してみたい。

まず四川省における竹林資源の開発と利用について総合的に述べるものがある。竹林資源の開発は、農村経済の活性化において、環境保護と生態系のバランスを一致させるため竹の植栽に対する農民の助力を得る必要がある（潘 1994、劉 1991）。陳ら（2005）は四川省の都市緑化建設における観賞用の竹の利用とその問題点を調査・分析し、都市緑化における観賞用の竹の開発に関する対策を述べた。

楊ら（2015）は竹文化が多文化主義の原点であるとして成都の地域的な景観において重要な位置を占めていると指摘した。また、四川の古典的庭園における竹文化について、竹の空間と芸術に関する概念の分析（劉ら 2016）や古典的庭園における竹の利用方法（金 1998）に関する研究がある。

さらに、竹林資源の活用に関しては、竹林資源による地域の活性化（四川工商学院課題組 2018）、竹工芸の職人の育成（馬 2016、朱 2021）、竹工芸を通じた竹林資源の大量利用（張ら 2018、呉ら 2020）などの報告がある。こうした中で、近年は竹で編んだ工芸品（以下「竹編」と表記）⁶⁾に焦点をあてた研究もみられる。そこでは竹編の技術の保護、工芸形態の変化（殷 2011、劉 2015、胡 2018）が新たな問題点として指摘されている。竹編に関する工芸技術の保護、開発と利用の実態を把握する必要もあると考えられる。

以上の四川省における竹文化に関する実践的な既存研究に対して、文献資料を積極的に活用したものは少ないといえる。そこには資料収集の制限など様々な要因があるだろう。そこで本研究では、『四川方言詞典』・『東亜同文書院大旅行誌』・諺語、そして新聞記事など様々な資料を駆使し、竹に内包される四川の生活文化を捉えることを試みる。

1.3. 研究方法

本研究の目的は、四川において竹がどのように機能しているのか、竹と生活文化のありかたについて考察することにある。方法は次の通りである。

- (1) 竹に関する方言語彙の本来の意味を記述し、竹からもたらされた文化・習慣を考察する。
- (2) 諺による比喩が生ずる竹の象徴的意味を考察する。
- (3) 『東亜同文書院大旅行誌』における書院の学生（以下、書院生）の視点からみた竹の特徴を考察する。

2. 『四川方言詞典』にみる竹文化の特徴

2.1. 『四川方言詞典』とは

中国では、改革開放以降、方言の研究がますます盛んになり、方言に関する辞典の編纂にも大きな関心が寄せられている。『四川方言詞典』（王文虎・張一舟・周家筠編、四川人民出版社 1987）をはじめ、『成都話方言詞典』（羅韻希・冷玉龍ら編、四川省社会科学院 1987）、『四川方言詞語彙積』（繆樹晟編、重慶出版社 1989）、『成都方言詞典』（梁德曼・黃尚軍編、江西教育出版社 1998）など、多くの四川方言の辞典が刊行されている。

四川方言は北方方言に属しており、使用人口は1億以上、北方方言においても重要な位置を占めている⁷⁾。本章で取り上げる『四川方言詞典』には7000以上の単語、35枚の図が収録され、1980年代に編纂された四川方言の辞典としては最大の規模であると評価されている⁸⁾。『四川方言詞典』の「前言」によると、単語の多くは四川出身の作家の作品から採用したものであるが、一部は四川人⁹⁾との日常会話から抽出し、構成したものである。四川方言の発音・文法などには北方方言との共通点があるほか、四川独自の言葉も多くある。

2.2. 『四川方言詞典』にみる竹文化

四川方言のなかには、多くの竹に関する語彙がみられる。これは、四川が竹の生育の盛んな地域であったことによるものである。

『四川方言詞典』は、四川および周辺地域において話されていた言葉・単語を知ろうと極めて重要な辞典である。そのうち竹とそれに関連するその周辺の単語をまとめて第1表に示した。11項目ほどあり、さまざまな竹に関する言葉がこの辞典に掲載されていることがわかる。竹が含まれた38語には、家具・調理器具・建築材・玩具・寝具・材料・調理用具・漁具・農具・運搬道具を表すものがあるが、食材としての竹の子などに関する情報は見られない。竹の語彙は道具類などを対象としたものに偏っていることがわかる。また、四川料理には「筍焼鳥」、「筍牛肉炒め」など、筍を食材とする料理が多く存在しているが、『四川方言詞典』には見られない。

紙幅の制限もあるため、ここでは38の語彙の中から運搬道具に関するものに注目したい。

第1表に示したように、竹を使用する運搬道具の単語は多種多様であり、背篋・密背篋・稀濫子背篋・鴛篋・稀眼背篋があげられる。このうち背篋についてみてみたい。

この背篋は普段どのように用いられる道具なのか、また四川人にとってどのような存在なのだろうか。2012年の「達州日報」、2017年の「重慶日報（農村版）」、2019年

第1表 『四川方言詞典』における竹に関する主な単語

| 番号 | 分類 | 名称 | 意味 | 頁 |
|----|------|-------|---------------------------------------|-----|
| 1 | 家具 | 梯梯 | 竹を打ち合わせて鳴らすもの。夜回りの警戒などに用いたりする。 | 11 |
| 2 | | 笋子 | 子供をしつけるための割った竹。 | 41 |
| 3 | | 吹火筒 | 火吹竹 | 50 |
| 4 | | 竿竿 | たげざお | 114 |
| 5 | | 烘籃 | 竹で編んだかごの中の陶器に炭を載せて暖める容器。 | 154 |
| 6 | | 鷄罩 | 竹で編んだ鷄籠。 | 167 |
| 7 | 運搬道具 | 背籠 | 背負うためのかご。丈夫で、大容量、実用的で、山でよく用いられる。 | 16 |
| 8 | | 密背籠 | 竹で編んだ竹籠。すき間なく竹を編み合わせる技法。米・麦などの粒物を入れる。 | 229 |
| 9 | | 扞担 | 竹で作った藁を運ぶ擔。 | 316 |
| 10 | | 稀籃子背籠 | 竹で編んだ背負うための籠。通常よりも隙間がある四ツ目形に編む技法。 | 401 |
| 11 | | 稀眼背籠 | | 402 |
| 12 | | 篋籠 | 竹製の箕。 | 444 |
| 13 | 玩具 | 竹花筒 | 花火の一種。 | 468 |
| 14 | 材料 | 蔑块 | 細い割り竹。 | 232 |
| 15 | | 腊蔑 | 立冬の後に竹を細く割り、湯を通したもの。 | 240 |
| 16 | 漁具 | 笆筊 | 魚を入れる竹籠。 | 5 |
| 17 | | 虾笆 | 魚介類を獲る道具。 | 404 |
| 18 | 調理器具 | 籐筐 | 大きな笊（ざる）。 | 22 |
| 19 | | 囤子 | 竹で編んだ食糧保存容器。 | 70 |
| 20 | | 甑子 | 米飯の蒸し器。 | 93 |
| 21 | | 五更鷄 | 茶の保温用の小さな炉。表面は竹で編んだもの。 | 399 |
| 22 | | 箸 | 箸 | 468 |
| 23 | | 箸子 | 箸 | 468 |
| 24 | 建築材 | 蔑折 | 竹垣 | 232 |
| 25 | | 籐壁 | 割り竹でできた塀。 | 257 |
| 26 | | 折子 | 竹垣 | 458 |
| 27 | | 竹笆 | 竹垣、寝具を作る竹の材料。 | 468 |
| 28 | 調理用具 | 笆笆 | 穀物等を乾燥させるための竹の敷物。 | 5 |
| 29 | | 籐籐 | 「干しもの」を作るために使われるざる。 | 22 |
| 30 | | 篩篩 | 篩（ふるい）、粉粒状の固体を選別する道具。 | 335 |
| 31 | | 晒籃 | 穀物等を乾燥させるための竹の敷物。 | 335 |
| 32 | | 晒席 | | 335 |
| 33 | 寝具 | 床笆子 | 寝具に載せる竹の敷物。 | 49 |
| 34 | | 涼板 | 夏用の寝具。 | 270 |
| 35 | 農具 | 響篙 | 馬、牛などの家畜を追いかけるための道具。 | 410 |
| 36 | | 棧棧児 | 植物を支える竹の支柱。 | 453 |
| 37 | | 竹扒 | 竹製農具 | 468 |
| 38 | 他 | 馬架子 | 竹製デッキチェア | 217 |

（『四川方言詞典』を参考に干筆作成）

の「華西都市報」、2021年の「眉山日報」の記事では、地元住民による次のような回顧談がみられる。

「子供の頃、母と四川東北南江の農村で暮らした。南江は大巴山地帯に属し、山は多く、山は高く、山は険しく、山は恐ろしく、車もなく、道も凸凹であった。生活に必要なものはすべて人力で、背篋で運んできた。祖父と母は竹で背篋を編むことが得意であった。

農事用は容積が大きく、買い物用は少し小さく、精巧に編んでくれた。中学校に上がってから、「背篋」でサツマイモ、南瓜などを運ぶようになった（後略）。¹⁰⁾

「私の故郷の大巴の山岳地帯では、道路は険しく不均一であり、何世代にもわたる私の祖先は背篋を背負って暮らしてきた。（中略）背篋は竹で織られており、いくつかのタイプに分けることができる。1つ目はジャガイモなどを運ぶもの、2つ目はしっかりと織るため漏れることなく、米や粉などを運ぶもの、3つ目は子供を運ぶために使用されるもので、「座座背篋」と呼ばれている（後略）。¹¹⁾

「背篋は、農村部でよく使われる竹製の道具の1つであり、日常生活でよく使われる道具でもある。1970年代初頭、私は小学校1年生の頃、春に、市場から戻ってきた母から、子供用の新しい背篋と一匹の子兔を渡された。毎日この背篋で兔の餌を運ぶようになった。（中略）この背篋は私とともに小・中学校時代を過ごした。田舎の学生が背篋を背負って豚の餌を運ぶことは最も一般的な家事手伝いであり、労働の始まりでもある（後略）。¹²⁾

「(前略)「背篋先生」という呼称の誕生は2014年に遡る。当時、生活環境が厳しく、交通も閉鎖的である山間部に暮らしていた重症心身障害児者に配慮して、仁壽県は“送教上門”(訪問教育・巡回指導)という障害児者の特別支援が進められている。ボランティアの先生たちは週末と休日を利用して、この子供たちのために各家庭を訪問し、国語、数学、美術などの授業を行うことにした。

先生が障害児者家庭を訪問するときには、教材を持参するだけでなく、障害児者のため、服や食べ物などの日用品も運んでくる。その時、持ち運びに便利な背篋を利用する。長年にわたり、先生たちはさまざまな物資を載せた背篋を背負い、山間部を歩き回り、背篋を活用した障害児者の特別支援活動の輪を広げていく（後略）。¹³⁾

上記の回顧談から以下の事が読み取れる。

① 厳しい環境における背篋

高原や山地に囲まれた四川省は地形が複雑多様で、西高東低の地勢が特徴である。すなわち、東部は盆地であり、西部は山岳地帯となる。昔から、西部は高い山々に囲まれ、交通に不便な集落が多かった。川の流量は少なく、船は使えないため、塩、布、薬などの日用品はすべて、背篋を用いて運ぶ人が少なくなかった。そのため、竹を基盤に成立、発達してきた背篋文化が生まれたと考えられる。中華人民共和国の建国以降、道路は徐々に改善されたが、高山地帯に点在している集落は依然として背篋を用いて運んでいる¹⁴⁾。ここから竹の運搬道具としての重要性が指摘できる。

② 背篋の意味

これまでに背篋という言葉が繰り返し使用してきたが、背篋という言葉は、使う人や場面により様々な意味合いを持っている。「山は多く、山は高く、山は険しく、山は恐ろしく、車もなく、道も凸凹であった。」¹⁵⁾ という過酷な環境において、大人にとって背篋はただ日常生活を維持する道具である一方、子どもの成長にとっては極めて重要な道具といえる。子どもは成長とともに背篋が与えられ、家事を手伝うようになる。親の愛情と期待が込められた背篋は、「労働の始まり」を意味する。

③ 背篋の多様性

過酷な環境において背篋はジャガイモなどを運ぶもの、米や粉などを運ぶもの、そして子供を運ぶために使用される。サイズは大小様々である。デザインも用途によって変わってくる。きわめて限定的な物質文化のなかで、竹がいかに四川人の生活に欠かせないものであり続けたかは背篋に大きく反映されているだろう。

④ 背篋の現在

2014年の「背篋先生」という事例から、背篋には新たな意味が与えられつつあるように感じられる。すなわち、21世紀の「背篋先生」はモノとしての教材を運ぶだけでなく、自ら勉強を教えているのであるから、「教育」そのものを運んでいると言える。運搬用具としての役割がさらに拡大されつつあるとも言えるだろう。

3. 四川の竹に関わる諺

「一半翠竹一半田、竹林深处聞鷄犬、溪水清清竹辺過、竹下老者編竹簍」¹⁶⁾ (半分は竹が茂り、もう半分は農地であるところに、竹林の奥からニワトリや犬の声がかすかに聞こえ、澄んだ川が竹林を流れている。一人の老人が竹の下に座り、竹の簍を作っている)。これは、まさしく四川の農村生活を描いている諺である。四川の竹は、多種多様で長年にわたって四川人の日常生活に欠かせない存在となってきた。例えば、食材として「竹米」(竹の種)、「竹笋」(筍)、「竹蓀」(キノコ)、「竹虫」(竹の虫)などがある。「竹筒」(竹を切って作った筒)は米を炊くこともでき、茶を焙煎したり、酒を醸したりすることもできる。また、銅の製錬に竹炭を使ったり、引水する時にも竹笕を使ったりする。竹を編み上げる細工物である竹編は日本の竹細工とほぼ同じものである。竹に囲まれて生活している四川人は、竹に特別な感情を持ち、数多くの諺も残っている。中には、生活や生産などに関する諺もあれば、物事の筋道に関するものもある。

3.1. 生活に関する竹の諺

四川省眉山市出身の蘇東坡は、その詩作『於潛僧綠筠軒』の中で「寧可食無肉、不可居無竹。無肉令人瘦、無竹令人俗」(食事には肉がなくても構わないが、住まいには竹がなくてはいけない。肉を食べないと人は痩せるが、住むところに竹がなければ人は俗っぽくなる)と書き、自分の住居には竹が不可欠であると主張し、自分の志しや思いを竹に託している。

生活に関する諺として、もう一つ典型的な例として挙げられるのは、「竹子開了花、不死也搬家」¹⁷⁾ (竹の花が咲いたら、すぐに別のところへ引っ越そう)という諺である。竹は一本一本独立して見えるが、その茎は地下で繋がっており、周りの竹とともに一つの生命共同体になっている。竹は花を咲かせることによって、種を残していく。その使命を遂げてから枯れていくのが竹の生態なのである。昔の人々の考えでは、この営みは日常生活へ影響を与え、一種の不吉の象徴にも見えるため、すぐに引っ越したほうがよいと言われている。このように古人は生活の知恵を諺に残した。こうした諺は代々伝わってきたのである。

また、「干竹竿都要榨出水来、鷄脚杆都要刮出油来」¹⁸⁾ (干枯らびた竹竿を水が出てくるまで搾り、脂肪のない鶏の足を油が出るまで搾り取る)という古くから伝わる四川の諺もある。これは、比喩表現を用いて、あらゆる手段を使って百姓から搾取する資本家や大地主などを強く批判し、昔の社会の底辺にいる人々の生活状態を描いている諺である。

3.2. 生産に関する竹の諺

四川の竹の諺には、生産に関するものも少なくない。例えば、「栽竹怕春遲」¹⁹⁾（竹は春の時期になる前に植えなければならない）、「立春栽竹、驚蟄結束」²⁰⁾（竹を植えるのは立春の時に始まり、啓蟄の時に終わる）などがある。これは、竹を植えるのに一番良い時期は立春から啓蟄までであり、その後は手遅れであるということを示した諺である。また、「栽竹莫共松、共松不成林」²¹⁾（竹を松とともに植えてはいけない。さもないと、竹林にはならない）は竹を植える時の注意事項についての諺であり、「好竹出好筍、好種好收成」²²⁾（質の良い竹は良い筍を産み、質の良い種は豊作に導く）、「年年留筍竹滿山」²³⁾（毎年筍を適当に残せば、将来竹がびっしりと生える）は、竹の生産量をあげるには、まず良い種を選び、毎年適度に筍を残すことも肝心であるということを示した諺である。

また、「東家種竹、西家治地」²⁴⁾ という諺は、東に住む人が竹を植えれば、西に住む人は、竹を植えなくても、ただ整地するだけで竹が自ら西へ生えてくることを意味している。これは、竹の生命力を称え、人々に竹を植えることを勧める諺である。

ほかにも、「家有千竿竹、子孫享清福」²⁵⁾（竹が千本ほどあれば、子孫に豊かな生活を与えられる）、「房前屋後栽滿竹、三年以後換新屋」²⁶⁾（家の周りにたくさんの竹を植えれば、三年後に新しい家が建てられる）、「三年陳柴、不抵当年活竹」²⁷⁾（三年の古い薪より、生きた竹）などのような諺も古くから人々に唱えられている。これらの諺からは、農家として竹を植えることが生活の豊かさにつながっていると考えられていることがわかる。いずれの諺も竹を植える利点を主張し、竹とその経済の関係を反映している。

3.3. 道理に関する竹の諺

人々に物事の筋道を示す竹の諺も幾つか挙げられる。例えば、「飯甑隔筍箕、人心隔肚皮」²⁸⁾（飯甑と筍箕は隔てられ、人の心は腹の皮で隔てられている）のように人間関係について述べたり、「一根竹棍易折断、三根竹棍当扁担」²⁹⁾（竹一本は、折れやすいが、三本なら天秤棒として使える）のような団結の力について語るものがある。また、「不種今年竹、哪有来年笋」³⁰⁾（今年竹を植えなければ、来年は筍の収穫ができない）のような「備えあれば患いなし」という道理について述べたり、「玉碎不改白、竹焚不毀節」³¹⁾（玉は割れても光沢は変わらない。竹は燃えても節は壊れない）や「人有志、竹有節」³²⁾（人には志しがあり、竹には節がある）などのような竹の品格を称えたりする諺が数多く残っている。

「飯甑隔筍箕、人心隔肚皮」の筍箕は竹で編み上げた竹編の一種であり、昔の四川人はこれを篩として使った。筍箕は水と米を分ける炊具である。昔の四川地区では、

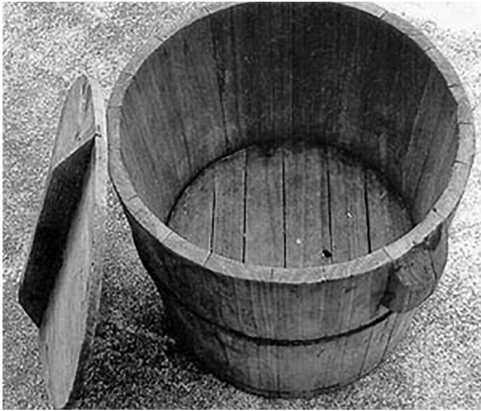


写真1 四川地区 炊飯用の飯甑
(張揚撮影 2021年10月15日)



写真2 四川地区 炊飯用の箆箕
(張揚撮影 2021年10月15日)

飯甑(写真1参照)も箆箕(写真2参照)も米を炊くのに不可欠なものであった。水と生煮えになった米を分ける時には、必ず箆箕によって篩にかけ、甑によって飯を炊く。箆箕で篩にかけないと米を蒸すこともできない。つまりこの諺は、心は腹の皮によって隔てられているようだと喩え、人の心はわからないものであるという意味となる。

これらの諺は、身近でよく見られる竹を通じ、「人の言うことを簡単に信じるな」「竹のようにしなやかに生きよう」「竹のように節目を大事に生きよう」などの教訓を示している。

現在、四川をはじめとする中国の西南地区では、竹に関する諺が様々な日常生活の場面でよく使われている。これらの諺の研究を通して、四川に住む人々の生活様式、風俗習慣などをよりよく理解できると考えられる。

4. 『東亜同文書院大旅行誌』にみる竹の描写

東亜同文書院の中国調査に関しては翟(2001)や藤田(2011)が詳細な分析を行っており、その調査実態を考察している。ここでは、中国における調査活動を東亜同文書の教育と並ぶ二大事業のひとつに位置付けられるとしている。この調査活動は、純粋な旅行であったのではなく、国家の要望による委託調査という性格を有する可能性があるとし唆された。また翟(2001)は東亜同文書院の調査活動について、戦前期の日本における組織的なものとして、その規模や歴史、成果、影響力は満鉄調査部に匹敵すると述べる。

一方で、近年では東亜同文書院による発行物を分析し、その文化面を捉えた研究も

みられる。例えば、須川（2017、2018）は本稿でも扱う『東亜同文書院大旅行誌』（以下、『大旅行誌』）に記載された台湾や香港の事例から、中国の食文化に接した書院生の認識を分析した。そこでは具体的に、現地への心情や母国への哀愁を読み取り、近代日本における青年のアジア観を考察している。また、石田（2020）では山東省の泰山を事例に、書院生の視点から、当時の泰山の景観や実態を考察している。

4.1. 資料の性格

本研究で扱う『大旅行誌』は1907年（第5期生）から1944年（第44期生）の間に行われた中国を中心に展開された書院生による調査旅行の成果のひとつである。東亜同文書院は戦前の日本が上海に設けた高等教育機関であり、経済を中心とした日中連携の人材育成を目的に建学された（藤田 2011）。書院生たちは、毎年卒業年次になると数か月間の中国全土を対象とした調査旅行を行い、『大旅行誌』はその成果のひとつである（藤田 2011）。この『大旅行誌』は日誌の形式をとっている。これとは別に書院生は『調査旅行報告書』も提出しており、これは『支那省別全誌』のもととなった（東亜同文書院編 2006、藤田 2011）。

藤田（2011）は東亜同文書院について、当時の日本の諸機関や知識人が欧米列強へ強い関心を抱くなかで、中国を中心としたアジアの実情を探るために創立された機関であるとした。『大旅行誌』もまた、当時の中国の経済や社会的背景を理解しようとする意図が働いているといえよう。東亜同文書院では卒業年次生が10から20の班をつくり、中国大陸や東南アジア諸国などの様々な地域で数か月間の現地調査を行なった（藤田 2011）。藤田（2011）によると、1907年から1943年までの35年間で約662のコースが確認されている。このうち四川省における各調査旅行について、藤田（2011）は各班の四川省内でのルートや地域的特徴、そして都市の近代化の在り様などを考察している。しかし、各々の事物や産品の詳細については、まだ分析の余地が残されているように思われる。本章では当時の書院生が経験した生の情報を捉えるためにも、この『大旅行誌』を活用したい。

本資料を扱う上での注意事項について触れておきたい。『大旅行誌』は資料的価値がある一方で、当時の風潮から、中国や中国人民に対する差別的な表現が所々みられる。本考察はこうした表現を容認するものではない。また、本稿で扱う『東亜同文書院大旅行誌』オンデマンド版は2006年に出版されたものを利用したい。

4.2. 道具としての竹、風景としての竹

書院生によって記述された竹の内容は大きく2つに分けられる。一つは道具としての竹であり、もう一つは風景としての竹である。前者は民具など、具体的に当地の

人々によって扱われているものである。後者は書院生たちが見た実際の植生や彼等のイメージを示す。ここではこうした2つの視点から、道具としての竹を3事例、風景としての竹を1事例みてみたい。

4.2.1. 製塩業と竹

まず、道具としての竹を確認する。そのなかでも製塩業と竹の関係は重要である。ここでは自流井を事例として確認してみたい。自流井は現在の「塩都」と称された四川省自貢市に位置する都市である。現在も市轄区のひとつとして自流井の地名がみられる。この地は塩業が盛んであり、書院生の訪れる目的はその製造に関する調査であった。『旅行誌』からは、ほぼ毎年のように書院生が自流井に足を運び、現地で製塩の作業を見学している様子が書かれている。

では、この塩業と竹にはどのような関係があるのだろうか。第八期生（旅行年は1910年）は自流井の塩業について、次のように述べる。

「(前略) これより鹽の事に付て述て見たい井戸の深さは二千尺から三千尺位で孔は直徑一尺だこれに十數間の櫓を作つてその上に小車をつけつまり滑車の仕掛で鹽水を汲み上るこの汲み上に用る筒は竹で長さ三丈位であるこれを引上るに水牛を使用し大概四頭から六頭位だこの綱は又竹の皮をよつて作つたものだ一回汲み上るに約三十分間を用する (後略)」(『旅行誌念志』、「滇山蜀水」、373-374頁)

ここでは竹は筒と綱として用いられる様子が書かれている。3丈(約9m)ほどの竹筒を長さ2000~3000尺(約600~800m)の井戸に挿入し、塩水を汲み上げる。そして、その竹筒は4~6頭の水牛の力によって巻き上げられる。その巻き上げに使用される綱もまた竹の皮が用いられている。

また、第二十期生の『旅行誌』において、さらに詳細な記述がある。

「(前略) 自流井の鹽は地下の鹽水を掬み出して釜で蒸發させたものである、今その製造の概略を述べやう。

地下の鹽水を掬み出すのが大變である、井の口徑は一尺も無くて深さは實に二千五百三十尺位のものもあると言ふ、井掘りに少くとも三四年はかゝるのである、この深い井から鹽水を掬み出すのに長さ十丈ばかりの竹筒を用ひその最下端には内部にのみに開く辦がある、一度井中に挿入せる竹筒を引き上げるのが又大變で綱は強靱な竹綱あつて井の上に竹筒と同じ高さの櫓が立てられその絶頂に轆轤を設けそれに綱をかけて小屋の中に引つ張つてある、小屋の中では直徑三間ば

かりの大杵がありそれに竹綱を巻き付けその杵を周囲に結びつけた六頭の巨大なる牛頭によつて廻すのである、掬み上げた鹽水は竹の樋によつて蒸溜所に導びかれる、此處では直徑三尺ばかりの釜が幾つともなく、据江られその上に注入されるのである。(後略) (『金声玉振』、「蜀魂の故地へ」、353-354頁)

ここでは第八期生の記述とほとんど同様であるが、さらに竹の樋についても書かれている。この竹の樋は塩水を蒸溜所の釜へ運ぶ道具である。以上のように、塩水を汲み上げるための筒、その筒を巻き上げるための綱、そして汲み上げた塩水を移動させる樋など、こうした製塩に関わる道具として竹を記述している。一方で、この記述を以て製塩業に関わる道具を網羅したとは言えない。書院生が記述したものは当然目に見える範囲のもので、より詳細な道具の名称や用途は『旅行誌』からは不明である。彼らの調査をまとめた『新修支那省別全誌』には自流井付近で用いられる器具の紹介しており、その数は56に及ぶ。製塩業と竹の関係性については今後も課題としたい。

4.2.2. 花干兒

次に、移動手段として用いられる竹を見てみたい。『旅行誌』の中で度々触れられるのが花干兒である。書院生の旅ではほとんどの場合、同行者がいる。それは轎子³³⁾や劃子³⁴⁾、そして護衛兵などであるが、その中でも特に「四川独特」のものとして花干兒が登場する。この花干兒について第十九期生は次のように説明している。なお、この花干兒の漢字は滑干兒や花杆兒など様々であるが意味は同様と考えられる。

「花干兒といふものは四川獨特のもので所謂轎子を簡便にしたものに過ぎぬ、細い竹を組み骨となし竹にて編みたるものを以てその坐處をつくり二本のたき竹に結びつけ前後二人の轎夫で荷ふものである、れは只下級のもの、乗るもの一般の商人などはこれに依るものが多い、我々も随分この恩恵を蒙つたものである。」 (『虎穴龍頷』、「蜀秦鄂紀行」、114頁)

この花干兒は、轎子をより簡易なものにしたもので、輿には竹が使われている。二本の竹を以て構成され、麻繩などで中央部に簾のように座るところを作った担架のような形をしている。第三十三期生はこの花干兒が発達した理由を次のように述べている。

「(前略) 四川省は山が多い、車道の開設が困難であつたため、斯る特殊な交通機關が発達したのである。(後略) (『南腔北調』、「成渝街道を行く」、245頁)

このように四川省の地勢が原因だとしている。また、花干兒とは単なる移動手段サービスの商売道具としてのみ登場するだけではない。第二十一期生の「土匪」と出会ったときの様子から読み取れる。

「(前略) その内何と思つたか一人の奴が横手の木立の繁みへ入つたと思ふと、二本の青竹に網を張つた花杆兒と言ふ奴を二人が担ひ、網の上に平服をきた、瘠せて蒼い顔をした男を乗せて出て來た。(後略)」

(『彩雲光霞』、「彩雲断章」、111頁)

このように、花干兒は、移動手段サービスとしての商売だけでなく、竹によって作られた輿全般として表現されている。

4.2.3. 渡河と竹

四川省へ入るルートのひとつに長江を遡航するものがある。四川省を通過した書院生たちはそのほとんどが三峡の激流を記述しており、そこではまた竹に関する道具が不可欠であることも書かれている。ここでは特に、竹がどのように活用されているかに焦点を当ててみたい。第十六期生と第二十六期生は次のように記述している。

「十日 霜 雨微峽中霧多く、秀峰奇巒繪の如し、千仞の斷崖水晶簾を懸たり、岩上道あれば佚子指大の竹網を以て曳き道なき時は竹桿の先の鉤を打ち掛て上る僅に分、誤れ舟旋回して流る、此日綱切れて舟將に覆んとす、増水益々甚しく難破船の流れ來る數を知らずに偏腦に泊す。」 (『虎風龍雲』、「千山萬水」、9頁)

「竹の綱で船を曳くと聞いた丈けで、文明の渦紋から遠く離れた蠻力中心の時代が彷彿されて、一種のアナクロニズムを感じさせられる。(中略)

激流に會へば汽船も矢張り原始的なこの竹索によつて、難を逃れるより方法はないのである。蠻力中心の交通路としての三峡。まだ／＼否定することの出来ない現實なのである。この蠻力中心の交通路。原始的な竹索。これ程人間の持つ、根強き忍苦を表徴してゐるものはなからう。

三峡の兩岸を見て居ると至る處岩角に鋭利なものでえぐり抜かれた様な無数の痕を見る。長き年月の間に曳子の肩と手で曳かれた竹索の磨水痕と、血みどろな喘ぎ、捨身的な彼等の労働の痕跡である。この簡単な然も峽中の運命を支配する竹索を泌々見てゐると、この原始的な自然物の實用化が柔よく剛を制する竹條の特性を巧みに利用してゐるのに氣付き支那人の忍従性と、此の三峡の峻烈さとを

痛感する。」

(『足跡』、「竹索」、168-169頁)

三峡の遡航が如何に危険か、そして竹によって作られた綱や竿(桿)が操船に果たす重要性を述べている。特に後者では、荒々しい河川に対して、操船者が竹を駆使して船を操る様子が書かれている。

4.2.4. 風景としての竹

ここでは書院生が風景の一環としての竹をどのように捉えたのかを検討してみたい。

まず、自然物の竹の描写については比較的多い。第十一期生は以下のように書いている。

「(前略) 満山紅葉し、緑竹翠松を交ゆ、幽邃の仙峽、思はず坐を立つ、(後略)」

(『沐雨櫛風』、「蜀山行」、445頁)

成都から峨眉山へ向かう途中の平羌峽を通過した時、その「仙峽」に感動している様子がうかがえる。このように、旅行の道中で竹を発見し、それを描写することが多い。また、第十六期生と第二十一期生は次のように書いている。

「二十七 雲有風 九時雲陽を遇ぎ盤沱に泊す、沿川の山々麓より頂へ懇に耕す、蓋し川人の勤勉による是れ又川省豊饒の因をなす、面相日人の氣あり、甘蔗青々竹林茂る、桐油樹の葉黄一點、行八十里」(『虎風龍雲』、「千山萬水」、12頁)

「(前略) 漸く雨も止んで黍蜀畑や水田や竹林の緑が描いた様に濃い。」

(『彩雲光霞』、「彩雲断章」、89頁)

竹(竹林)は甘蔗や水田、桐樹、モロコシと共に書かれている。当時の四川省の農村景観を読み取ることもできよう。なお、都市部にも数は少ないが竹の描写が登場する。それは例えば、公園や宿泊している院の庭先に生えているものである。

以上、ここでは東亜同文書院生の『旅行誌』に書かれた四川省の竹の記述を紹介した。こうして挙げた各記述を今後どのように検討するのが課題となる。例えば、他省との比較の視点がある。竹の植生は四川省を除いた雲南省や貴州省にもみられる。本文中で触れることができなかったが、書院生が四川省に入ったルートも竹への認識に大きく関連していると考えられる。こうした各省との共通点や相違点を捉えること

も可能である。また、他の資料を用いてより詳細に竹の記述を分析することもできる。『支那省別全誌』や『支那経済全書』を活用し、『旅行誌』からだけでは捉えることができない竹の産業面も補う必要があるだろう。

5. おわりに

ここまでみてきたように、四川の竹は多く場面においてさまざまな用途をもち、四川人の生活に欠かせない植物である。

本研究は、四川における竹と生活文化のありかたについて考察することを目的とした。現時点での筆者らの研究対象は、四川の人々の暮らしにおいて多岐にわたって用いられている竹に関連する文化である。本稿では竹文化研究の第一歩として資料調査による内容のうち、現時点で明らかとなった事柄についてまとめた。

しかしながら、四川において現在進みつつある竹林の開発はその地域の環境と住民の生活や文化を大きく変える可能性をはらんでいる。今後は、四川省における竹林の開発状況をより詳しく観察しながら、竹文化にどのような影響がみられるのかについて、研究を深めていきたい。

注

- 1) 「竹文化に宿る東方美学」(<http://www.cnta-osaka.jp/yuchina/2077>)、2021年12月31日閲覧。
- 2) 「全国竹産業発展規劃 (2013~2020)」(<https://wenku.baidu.com/view/7354e228dc3383c4bb4cf7ec4afe04a1b071b0ec.htm>) 2022年1月4日閲覧。
- 3) 「四川向竹經濟強省轉變：竹林這道美麗的風景線」『經濟日報』(第14版)、2018年5月28日。
- 4) 「全省竹林面積居全國第一」『四川日報』(第11版)、2021年6月23日。
- 5) 「這個竹研究站 專門探尋竹子秘密」『四川日報』(第8版)、2018年3月13日。
- 6) 竹で編んだ工芸品。
- 7) 王文虎・張一舟・周家筠編(1987)「前言」『四川方言詞典』四川人民出版社。
- 8) 繆樹晟・繆鋼珠・陳玉清(2002)「談談四川人編四川方言辭書」『辭書研究』116-120。
- 9) 「四川人」は一般的な名称であり、川人あるいは巴蜀人とも称される。
- 10) 「那浸泡着汗水的背篋」『達州日報』(第4版)、2012年3月21日。
- 11) 「背篋」『重慶日報(農村版)』(第8版)、2017年12月22日。
- 12) 「背篋」『華西都市報』(第12版)、2019年10月16日。
- 13) 「小背篋里裝大愛——“背篋老師”送教下鄉記」『眉山日報』(第4版)、2021年5月25日。
- 14) 金鎬傑・龐建春(2000)「中国川東地区的背具運送一對四川省巴中地區南江縣背架、背篋的實地調查報告」『西北民族研究』1、116-123。
- 15) 前掲10)。
- 16) 『華西都市報』(A10 寬窄巷)、2017年4月25日、10。

四川省の竹文化に関する資料初探

- 17) 2021年10月26日、内江市第一人民医院、Y氏（女性）59才、医師、四川省内江市在住、電話インタビュー。
- 18) 「四川諺集要（上）」(http://www.360doc.com/content/16/1230/09/37538389_618828359.shtml)、2021年11月5日閲覧。
- 19) 「常用的竹諺」(<https://wenku.baidu.com/view/848f4a10a1c59eef8c75fbfc77da26925c59694.html>)、2021年11月16日閲覧。
- 20) 2021年10月28日、L氏（女性）52才、農家、四川省眉山市在住。
- 21) 2021年10月22日、Z氏（女性）72才、元大学教授、四川省成都市在住。
- 22) 四川農民日報編（1965）『四川諺（第二集）』四川人民出版社、16。
- 23) 「諺大全」(<http://www.esk365.com/yanyu/yyso.php?wd=%E7%AB%B9&stype=1>)、2021年10月30日閲覧。
- 24) 前掲21)。
- 25) 前掲17)。
- 26) 「常用的竹諺」(<https://wenku.baidu.com/view/848f4a10a1c59eef8c75fbfc77da26925c59694.html>)、2021年11月16日閲覧。
- 27) 前掲19)。
- 28) 李開森編（2014）『俗語万言』人民日報出版社、77。
- 29) 四川農民日報編（1965）『四川諺（第一集）』四川人民出版社、36。
- 30) 前掲18)。
- 31) 「諺大全」(<http://www.esk365.com/yanyu/yyso.php?wd=%E7%AB%B9&stype=1>)、2021年10月30日閲覧。
- 32) 「常用的竹諺」(<https://wenku.baidu.com/view/848f4a10a1c59eef8c75fbfc77da26925c59694.html>)、2021年11月16日閲覧。
- 33) 輿のこと。
- 34) 小舟や小さなボートのこと。

参考文献

日本語

- 須川妙子（2017）「『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観：台湾の例」『文明21 = Civilization 21』38、49-55。
- 須川妙子（2018）「『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観：香港の例」『文明21 = Civilization 21』40、65-70。
- 翟新（2001）『東亜同文会と中国：近代日本における対外理念とその実践』慶応義塾大学出版会。
- 東亜同文書院編（2006）『東亜同文書院大旅行誌』雄松堂出版。
- 藤田佳久（2011）『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』ナカニシヤ出版。

中国語

- 陳娟・陳其兵（2005）「觀賞竹在四川的应用現狀与發展对策」『竹子研究彙刊』1、54-58。
- 胡旭・劉強・阿木補出（2018）「青神県竹編産業現狀分析及可持續發展建議」『四川農業科技』6、53-55。

- 金荷仙・華海鏡・方偉 (1998)「竹文化在中国古典園林中的運用」『竹子研究彙刊』3、66-69.
- 李開森編 (2014)『俗語萬言』人民日報出版社.
- 劉洪志・賈玲利・杜宇 (2016)「四川古典園林中的竹文化研究」『中国城市林業』5、41-44.
- 劉慧 (2015)「四川青神竹編技藝變遷与保護困境探析」『重慶文理學院學報』1、10-13,94.
- 劉雲 (1991)「四川省竹類資源的開發利用」『自然資源』6、66-68.
- 馬小鴻 (2016)「青神竹編傳統工藝傳承及現狀初探」『青春歲月』7、449.
- 潘瑞清 (1994)「四川省竹材資源的開發利用」『竹子研究彙刊』1、79-84.
- 石田曜 (2020)「東亞同文書院學生眼中的泰山」『海岱學刊』1、140-152.
- 四川工商學院課題組 (2018)「眉山市竹文化資源開發与利用研究」『四川工商學院學術新視野』3-1、21-24.
- 吳婕妤・陳紅・吳智慧・費本華・張文福 (2020)「四川地區竹編工藝特性研究」『竹子學報』1、90-94.
- 楊羽翥・何蕤・劉玉蓉 (2015)「成都地域景觀竹文化的表達研究」『中国觀賞園藝研究進展2015』、623-626.
- 殷燦新 (2011)「四川青神竹編藝術的傳承与創新」『中華文化論壇』3、65-67.
- 張雨活・陳芝賢・費本華・吳智慧・陳紅 (2018)「中国不同地域竹編工藝的發展現狀」『世界竹藤通訊』6、37-41.
- 朱一然 (2021)「四川青神竹編的現狀分析与設計轉型」『今古文創』4、79-80.